留学、その後

「挑戦する姿勢」から獲得したアフリカ－選択肢の無い世界－滞在経験～

服部裕也

2005年9月から2006年6月までの9ヶ月間、私は早稲田大学の交換留学プログラムでCalifornia Polytechnic State University, San Luis Obispoに留学しました。今回は、私が留学生活から得た「挑戦する姿勢」によってその後如何に世界・可能性を広げることが出来たかを、カメルーンでの生活を例にとって書こうと思います。

1、留学後
－「挑戦する姿勢の大切さ」の継続的意識－

私が留学生活で得た一番大きなことは、「挑戦する姿勢の大切さ」でした。失敗を恐れて何もしなければ、何も得ることは出来ない。しかし、自分に鞭を打ってものごとに挑戦すれば、たとえ失敗したとしても、必ず何かを得ることが出来る。私が留学中に悩み、苦しんだ末に至った結論です。（詳細は本誌No.5からNo.10を御参照下さい。）

留学後は、この挑戦する姿勢を常に意識してきました。その一つの例として、カメルーンでの生活が挙げられます。

2、アフリカ
－選択肢が無い、もしくは限られている世界－

2008年1月から3月までの2ヶ月間、私はカメルーンのReach Outという女性のエンパワーメント、孤児・寡婦への教育・栄養面のサポートをするNGOでインターンシップをしてきました。私は今年の4月からある総合商社で働いているのですが、その前に長期で海外に滞在したかったこと、開発経済学専攻の者として最貧地域であるアフリカの現場を見ておきたかったこと、しかもそれをビジネスレベルではなく草の根レベルから見ておきたかったことが、上記場所・機関を選んだ主な理由です。アフリカ行きに関してはためらわれる気持ちがありました。その気持ちはとてつもなく大きかったです。しかし、上記の理由が怖さを上回ったこと、そして何より留学生活から得た「挑戦する姿勢の大切さ」を意識していたからこそ、実現に踏み切ることができました。

ある街町の中心にて。モノの質が悪く、そして慢性的に足らない。

カメルーンは西アフリカに位置する、人口約1600万人(2004年)の国です。一人当たりGDPは＄2,421(2004年)と、平均値だけを見れば、生活レベルはアフリカの最貧国より少々上にあるいえます。しかし、そこで私が生活して感じたこと、それは「人々に選択肢が無い、もしくは非常に限られている」ということです。そしてそれこそが「貧困」である、と定義できるのではないか、と思いました。

まず、彼らは毎日生きるために生きています。大部分の家庭には水道が通っていないため、毎日井戸に群がって水を汲まなければなりません。多くの人は、毎日の出費を賄うため、わずかなお金を稼ごうと一日かけてフルーツや食べ物を売っています。たとえ誰かが富を持ったとしても、彼もしくは彼女は持たざる親族・隣人を扶養する暗黙の“義務”があるため、裕福になることは非常に難しいのです。日本やアメリカのように、自分のやりたいことをやって一日を過ごす、ということは彼らにとってはなかなか出来ないことなのです。

次に、カメルーン人が置かれている環境が劣悪です。生活環境でいえば、ごみをそこらに捨て、ビニールも構わず燃やしてしまっています。非常に古いディーゼル車が、びっくりするくらいの黒煙を上げて行き交っています。雇用環境も非常に悪く、大学を卒業した人ですらほとんど職にありつけません。30歳になっても親のすねをかじらざるを得ない男性も多いということです。それを改善するべき政府の状況にも問題があります。汚職まみれで、国の改善ではなく己の私腹を肥やすことに重きが置かれています。

このように、カメルーンの人々が生きるために生きなければならないのは、そして彼らが置かれている劣悪な環境を受け入れざるを得ないのは、「人々に選択肢が無い、もしくは非常に限られている」からだと思います。

3、先進国と途上国の差
－生まれた場所の違いから生じる不公平さ－

私達先進国に住んでいる人間と、カメルーンのような国にいる人間とでは、選択肢の多さが決定的に違います。私は普通に暮らしていれば好きなことを選択することが出来ますが、彼らは生活する上で選択することすら許されない、時には、生きるという選択肢すら残されない場合もあります。彼らが海外に活路を見出そうにも、お金以上にビザが問題とな